

(素案)

新宿区多文化共生まちづくり会議
第 9 回会議(2026 年 6 月 17 日)資料

新宿区多文化共生まちづくり会議 審議結果報告書

- (注)・この報告書は作成中のものです。
第 1 章の人口データ等は、最新のデータを後日掲載します。
- ・第 3 章まで (25 ページまで) は「審議経過」です。
これまでの会議資料の概要と、主な意見を掲載しています。
 - ・第 4 章 (26～31 ページ) は「提言」です。
「提言」は、会議での委員の意見を分類して整理を行ったうえで、文章としてまとめたものです。

令和 8 年 (2026 年) ●月●日

新宿区多文化共生まちづくり会議

はじめに

(注) このページでは「多文化共生まちづくり会議」からのあいさつ文を掲載します。

目次

第1章 多文化共生のまちづくり	・ ・ ・ ・ ・
1 新宿区の外国人住民	・ ・ ・ ・ ・
(1) 外国人住民の人口の推移	・ ・ ・ ・ ・
(2) 新型コロナウイルス感染症の拡大前後の推移	・ ・ ・ ・ ・
(3) 国籍別の人口	・ ・ ・ ・ ・
(4) 在留資格別の人口・推移	・ ・ ・ ・ ・
2 新宿区が多文化共生施策	・ ・ ・ ・ ・
(1) 日本語学習への支援	・ ・ ・ ・ ・
(2) 外国人相談窓口の運営	・ ・ ・ ・ ・
(3) 窓口等における多言語対応の推進	・ ・ ・ ・ ・
(4) 外国人への情報提供	・ ・ ・ ・ ・
(5) 交流事業	・ ・ ・ ・ ・
(6) しんじゅく多文化共生プラザ	・ ・ ・ ・ ・
第2章 審議テーマについて	・ ・ ・ ・ ・
1 第7期テーマ	・ ・ ・ ・ ・
2 理由	・ ・ ・ ・ ・
第3章 審議経過	・ ・ ・ ・ ・
1 審議の進め方	・ ・ ・ ・ ・
第1回・委員委嘱、審議テーマの設定	
第2回・新宿区の状況、取組	
第3回・交流事例の紹介	
第4回・事業検証・振り返り	
第5回・友好都市交流事業の紹介	
第6回・地域の実情を視察	
第7回・実態調査の考察	
第8回・交流のあり方の検討	
第9回・報告書（素案）	
第10回・報告書（案）	
第4章 提言	・ ・ ・ ・ ・
1 文化体験やイベント、地域活動など交流の機会は様々である	・ ・ ・
2 日本人と外国人との協働による交流の促進	・ ・ ・ ・ ・

- 3 イベントや地域活動への、多様な世代（親子、高齢者 若者）の参加促進 . . .
- 4 交流を促進するための効果的な情報発信
- 5 新宿区は多文化共生のモデルケースである
- 6 おわりに

資料

第7期 新宿区多文化共生まちづくり会議委員一覧

第1章 多文化共生のまちづくり

1 新宿区の外国人住民

（注）このページでは、外国人住民の人口を掲載します。

- ・ 人口の推移
- ・ 国籍別の人口
- ・ 在留資格別の人口

2 新宿区の多文化共生施策

（注）このページでは、新宿区の実施を掲載します。

- ・ 日本語学習への支援
- ・ 外国人相談窓口
- ・ 在留資格別の人口
- ・ 外国人への情報提供
- ・ 交流事業
- ・ しんじゅく多文化共生プラザ

第2章 審議テーマについて

1 第7期テーマ

多文化共生の推進に向けた交流について

2 理由

- 令和5年度に実施した多文化共生実態調査では、外国人住民と日本人住民ともに「交流」に関する回答が高かった。
 - ・「新宿区が進めるべきこと」という質問では、「交流会やイベント」との回答が外国人住民で1位(46.5%)、日本人住民で2位(37.9%)と高かった。
- 前期の第6期会議では、「地域における多文化共生意識の醸成について」を審議テーマに議論を進めたところ「交流」に関する意見が多かった。
 - ・日本人と外国人が交流して親しくなることで、いろんな問題を話しやすくなる。等
- 前期の第6期会議では、大久保地域のまち歩きと施設見学を行った。
 - 地域センターや図書館といった施設では、日本人と外国人の交流拠点として様々な取組が行われていた。多文化共生の推進のためには「交流」が重要であることを再認識した。
- 委員に第7期テーマのご意見を伺ったところ、次のご意見をいただいた。

【交流に関するご意見】

「「交流のあり方について」を提案します。地域のお祭りやイベントへの外国人の参加を促して地域コミュニティの活性化させ、地域課題を解決していきたいと思っています。」

【振り返り（区取組の検証と評価）に関するご意見】

「Plan-Do-See の中の See の時期と思う。これまでを振り返り、また、実態調査の結果も踏まえ、現時点での課題の洗い出し、今後取り組んでいくべき事項と優先順位の提案を行ってもいいのかなと思います」

【偏見・差別に関するご意見】

「偏見・差別をテーマにしてもよい。外国人と日本人が思っている偏見・差別にずれがあるかもしれない。」

「交流」をキーワードに審議を行うことで、相互理解と地域コミュニティの活性化を図り、多文化共生をさらに推進することができる。

また、交流会やイベントを知らせるための「情報提供」や、コミュニケーションを図る「日本語学習」など、これまでの取組の振り返りを行うこともできる。

さらには、「交流」により互いの文化を認め合うことで「偏見・差別」の解消につなげることができる。

このように、委員のご意見を反映することが可能である。

以上のことから、テーマを、「多文化共生の推進に向けた交流について」とした。

第3章 審議経過

1 審議の進め方

第7期会議では、議論を深めるため、「交流事例の紹介」や「区の実情の検証」、「地域の実情把握（まち歩き）」などを行うこととした。

そのうえで、審議テーマである「多文化共生の推進に向けた交流について」の提言をまとめることとした。

各回の審議内容は下表のとおりである。

開催日程		回数	主な内容
令和6年 (2024年)	10月24日(木)	第1回	委員委嘱、審議テーマ設定
	12月11日(水)	第2回	審議（情報の共有） ・新宿区の状況、取組
令和7年 (2025年)	3月25日(火)	第3回	審議（交流事例の紹介） ・地域の祭、イベント
	6月18日(水)	第4回	審議（事業検証・振り返り） ・交流を促進するための情報提供等
	8月1日(金)	第5回	審議（友好都市交流事業の紹介） ・異文化交流の取組
	10月29日(水)	第6回	審議（まち歩き） ・地域の実情を視察
令和8年 (2026年)	1月23日(金)	第7回	審議（実態調査の考察） ・データ分析等
	3月25日(水)	第8回	審議（交流のあり方の検討）
	6月17日(水)	第9回	報告書（素案）
	7月31日(金)	第10回	報告書（案）
	8～10月	第11回	報告書提出

第1回会議

第1回会議では、区長から第7期委員への委員委嘱を行い、その後、委員の互選により会長と副会長を選任した。

そして、審議テーマを「多文化共生の推進に向けた交流について」として審議を進めることとした。

さらに、各回で審議内容として「交流事例の紹介」「地域の実情の把握」「多文化共生実態調査の考察」「交流のあり方の検討」などについて話し合うことを確認した。

また、各委員からの自己紹介の時間を設け、多文化共生に関する思いや、自分の外国のルーツ、地域での活動などについて伺った。



▲委嘱状交付の様子



▲会議の様子

第2回会議（情報の共有）・新宿区の状況、取組

第2回会議では、新宿区の外国人住民の状況や、地域特性について説明を受け、各委員が新宿区の状況について認識を深めた。また、新宿区の取組についても説明を受けた。

会議では「外国人の住みやすい地域というのは、日本人にとっても住みやすい地域でなくてはならない。」などの意見があった。

【会議資料の概要】

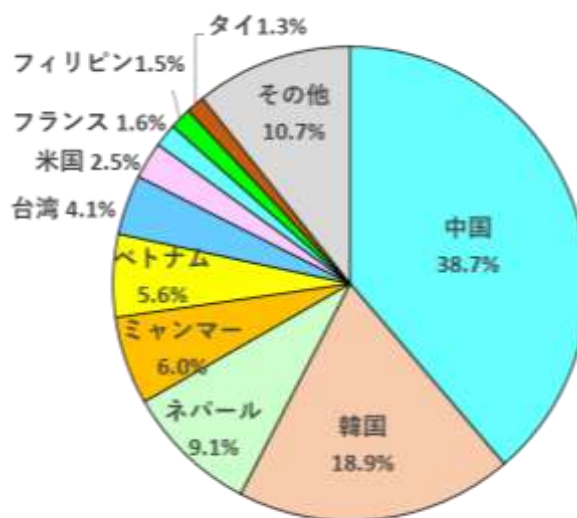
◆新宿区の人口

2024（令和6年）12月1日（人）

		男	女	合計
住民基本台帳人口		177,700	175,629	353,329
内訳	日本人	152,379	152,665	305,044
	外国人	25,321	22,964	48,285

◆外国人住民の国籍別人口（上位10） 2024（令和6年）12月1日

	国名	人数	%
1	中国	18,706	38.7%
2	韓国	9,126	18.9%
3	ネパール	4,380	9.1%
4	ミャンマー	2,904	6.0%
5	ベトナム	2,725	5.6%
6	台湾	1,974	4.1%
7	米国	1,217	2.5%
8	フランス	759	1.6%
9	フィリピン	714	1.5%
10	タイ	607	1.3%
	その他	5,173	10.7%
		48,285	



◆新宿区の地域特性

新宿区は、昔から宿場町であり、多くの人が行き交うまちとして発展してきました。新宿区は多様性に富んだまちです。

- ・歌舞伎町など活気ある繁華街
- ・西新宿の高層ビル街
- ・閑静な住宅街
- ・潤いある河川 ・緑豊かな公園
- ・神楽坂など風情ある街並み
- ・文化歴史が継承されている地域

◆区の実組

(会議資料の抜粋)



【会議での主な意見】

- ・外国人の住みやすい地域というのは、日本人にとっても住みやすい地域でなくてはならない。
- ・留学生はボランティア活動に興味を持っていて、参加した学生たちは地域住民や主催者との交流ができて目が輝いているのを感じる。
- ・新宿区が幅広く多くのことに取り組んでいることを知れて、とてもよかった。
- ・自分の経験では、公園での餅つきや、神社での神楽の奉納には、外国人の方も見に来ていた。
- ・外国の文化だけでなく、日本の文化を紹介するイベントや交流会も情報発信していくとよい。
- ・外国人の方がボランティア活動に関わっているとの話が合った。ボランティアのネットワークができれば、すごくいいことになると思った。
- ・異文化のコミュニケーションは楽しいという視点で活動ができて面白いと思う。
- ・ボランティアの方々とのつながりは、まさに日本人と外国人との交流である。

第3回会議（交流事例の紹介）・地域の祭、イベント

第3回会議では、日本人と外国人が地域で交流している具体的な事例について情報共有した。会議では「外国人もイベントの運営に参加するとよい」「交流はイベントだけでなく様々な機会がある」などの意見があった。

【資料の概要】

●盆踊り

▼留学生が盆踊りに参加



▼出身国の紹介ブースを出展



●料理体験

▼フランスのクレープ作り
(日本語学校と地域の町会が参加)



●日本文化の体験

▼国際交流「ひなまつり」【新宿未来創造財団】



●スポーツ

▼箱根山駅伝大会には外国人も参加



●地域センターまつり（区内10か所で開催）

▼大久保地域センター 五月まつり



●各種イベント

- ・大新宿区まつり「ふれあいフェスタ」
（毎年、秋に開催される区主催のイベント）
- ・節分祭・豆まき
- ・図書館でのイベント（外国語での読み聞かせ）
- ・日本語スピーチコンテスト など



●清掃活動

▼留学生などの外国人が清掃活動に参加。



●防災訓練

日本人と外国人が防災訓練に参加することで、災害時に共に助け合う意識が高まります。

●安全・安心の活動

日本人と外国人が一緒に防犯・防火に取り組むことで、安全・安心なまちづくりが推進されます。



【会議での主な意見】

- ・私の日本語学校では、清掃活動、箱根山駅伝、スピーチコンテストしゃべれおん、地域の盆踊り大会などに参加している。留学生が地域の方と交流できる機会があれば、積極的に参加したい。
- ・地域センターのイベントだけを見ても外国人がいっぱい参加している。これは新宿区の特徴であると思う。
- ・イベントの後に良かった点、改善すべき点をフィードバックするとよいと思う。
- ・海外では、定住者に対して地域イベントのボランティア参加というプログラムがある。

早い段階でコミュニティーに参加して交流すれば、本当の意味で地域住民になると考えている。

- ・ミャンマーのフェスティバルに行った時に、ミャンマーの文化を感じてワクワクした。
- ・日本人が外国の文化に触れる機会がもっとあるとよいと思う。
- ・大久保まつりのパレードに参加している。参加したベトナム人からは、今年も参加したいとの積極的な問い合わせがある。
- ・大久保まつりに娘も参加していて、Kポップを踊っている。まさに多文化交流といった感じである。
- ・外国人も日本人も参加できる交流スペースを運営している。
- ・親子で楽しめるカフェを開催している。
- ・大久保図書館で、外国人の方に外国語で読み聞かせを行う試みをしている。
- ・素晴らしいイベントがあることを、ほとんどの外国人は知らないと思う。
- ・外国人の参加者を増やすために、SNSなどを使うとよいと思う。
- ・日本人と外国人が、様々な活動やイベントを一緒にやると仲よくなる。文化や言葉の壁も減ってくると思う。
- ・大久保まつりに参加している。運営事務局の方を見ていると、ボランティアでここまでやるんだと感心する。拍手を送りたいぐらい皆さん頑張っている。
- ・新宿未来創造財団の「ひなまつり」に参加したことがある。着物の着付けや、生け花などの日本の文化体験ができる素晴らしいイベントであった。参加したい人に情報が届くとよいと思う。
- ・日本語ボランティア教室をやっており、清掃活動や地域イベントに参加している。
- ・交流の目的を明確にすることが大事。
- ・外国人はイベント情報になかなかとり着けない。
- ・情報を広めるためには、日本語学校や専門学校、町会・自治会、商店会などのネットワークが大事と思う。
- ・情報発信は重要だが、SNSは年代によって使うものが異なる。
- ・外国人が主催者側として参加したら、多分コミュニティーへの愛着が非常に大きくなると思う。
- ・参加したいレベル別の情報発信の仕方をするとう非常に効果的と思う。
- ・外国人がイベントに参加するときに、運営側のボランティアとして参加すると地域に溶け込めると思う。
- ・交流はイベントだけでなく、様々な機会があると思う。

第4回会議（事業検証・振り返り）・交流を促進するための情報提供等

第4回会議では、区の多文化共生に関する事業の内容と実績をもとに検証と振り返りを行った。会議では「情報は発信するだけでなく、どのように人へつなげていくかが大事」などの意見があった。

【資料の概要】

1 交流を促進するための「情報提供」に取り組んでいます

(1) 外国語版SNS

行政情報、生活情報、災害時の情報を提供しています。お祭りやイベントの情報も提供しています。1か月に10～15件程度配信 Facebook、X、LINE、Instagram

【お祭りやイベントに関する情報】

- ・早稲田さくらまつりが開催されます！
- ・新宿年末クリーン大作戦
- ・大新宿区まつりふれあいフェスタ
- ・新宿中央公園夏まつり納涼盆踊り大会
- ・行こう！触れよう！防災フェス in 歌舞伎町
- ・大久保五月まつり など



(2) 外国語広報紙（新宿ニュース）

地域のイベント、まち歩きスポット、図書館やスポーツ施設など、交流を促進させる情報を掲載しています。発行：年3回発行

【過去に掲載した交流促進に関する記事】

- ・地域のイベントに参加してみませんか？
- ・町会・自治会で地域のつながりを深めよう
- ・図書館に行こう！
- ・区内のスポーツ施設
- ・日本の年中行事 など

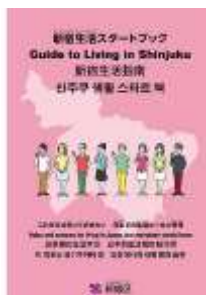


(3) 外国語生活情報誌、(4) 外国人向け生活情報ホームページ

(5) 新宿生活スタートブック（冊子）・新宿生活スタートガイド（動画）

生活に必要な情報を掲載しています。その中で「近所付き合い」「町会・自治会」など、地域参加を促進させる情報を掲載しています。図書館やスポーツ施設、博物館、地域センターなど交流の拠点となる施設も掲載しています。生活ルールやマナーを周知することで、互いに気持ちよく生活することができます。

▼新宿生活スタートブック（冊子）



▼新宿生活スタートガイド（動画）



2 コミュニケーションを図るため「日本語学習支援」に取り組んでいます

- (1) 新宿区日本語教室 10所(15教室)で、初級日本語教室を運営
- (2) 日本語ひろば レベル別の日本語指導を週4回実施
- (3) 子ども日本語教室(こどもクラブ新宿) 日本語と教科学習の支援を実施 小4～中3対象
- (4) 日本語最初級者向け教室の運営 最初級者が、集中して学習する日本語教室を実施

3 相互理解を促進するため「交流事業」に取り組んでいます

地域で外国文化を紹介することにより、お互いを理解し、多文化共生意識を醸成しています。

- ・ミャンマー文化教室 ・韓国舞踊、伝統衣装着付け体験 ・タイの料理講座・文化交流
- ・ネパール・ベトナムの民族衣装の体験 ・ベトナム書道体験
- ・インドネシア・バリの「バリ猫」のペイント ・アラビア文字書道体験
- ・ネパール・ペルーの民族舞踊 ・フランスの文化交流及び料理体験



4 相互理解を促進するため「プラザの運営」に取り組んでいます

日本人と外国人との交流を促進し、文化、歴史等の相互理解を深め、多様な文化を持つ人々が共に生きる地域社会の形成に資するため、しんじゅく多文化共生プラザを運営しています。多文化共生に取り組む人々を支援し、ネットワーク化を進めるため、**地域住民や活動団体の情報交換や活動をPR**できる場として「**新宿区多文化共生連絡会**」を運営しています。

【会議での主な意見】

- ・大久保地域センターでは、毎年、大久保五月まつりを開催している。韓服の試着や、ネパールの踊りなど、外国の文化を取り入れている。
- ・大久保五月まつりは、地域の人たちがたくさん集まってくる。日本の子どもたちも外国の文化に自然に触れることができ、これはすごくいいものだと思っている。
- ・新大久保インターフェスでは、日本の子どもたちが意外と集まってこなかった。小学校に案内に行ったが、町会が主催なら安心して行けるという話があった。
- ・チラシだけ配っても参加してもらえない。大きな課題である。
- ・日本の子どもたちが外国の子どもたちと仲よくなって、友達になって、お互いに理解し合う絆をつくっていくようなことをやりたい。
- ・子どもは、親や友達がイベントに行くと、一緒に行くと思う。
- ・イベントに参加したくても、1、2か月先までスケジュールを組んでいて参加できない人が多い印象がある。
- ・大久保五月まつりで、韓服の試着を開催した。ただ着るだけではなく、韓国の礼儀や挨拶などを行った。
- ・韓国の文化を知ってもらいたい。日韓で仲良くなるとよいと思う。

- ・ネパール人は年に何回かフェスティバルをやっている。新大久保インターフェスでは、短い準備期間で頑張って準備した。
- ・学生に一番使うSNSを聞いたところ、インスタグラムが圧倒的に多かった。
- ・最近のミャンマー人は、SNSでテレグラムを使っている。
- ・高齢者はインターネットが使えなかったり、スマートフォンを持っていたても電話しかできない人がいる。
- ・新宿区は留学生が多い。SNSでの情報発信だけでなく、日本語学校から学生たちに情報を流すとよい。
- ・日本語学校や専門学校などのメーリングリストを作って、区からの情報を発信するとよい。
- ・イベントは、関心の無い人にも振り向いてもらう必要がある。
- ・大きなイベントだけではなく、小さなイベントをいくつも継続的にやってもいいと思う。
- ・日本語学習や交流は、対面で行うことがすごく大事と思うが、今の時代では、交通費と時間をかけて行って帰ってくるのは、結構、ハードルが高くなっている。
- ・イベントに大人が参加して楽しんでいると、子どもも自然と参加するようになる。
- ・情報は発信するだけでなく、どのように人へつなげていくかが大事である。
- ・留学生がイベント等のボランティアとして参加する仕組みをつくれればよい。そうすれば、留学生たちがSNSで発信してくれる。
- ・日本語を教わっている子どもと親、そして教えているボランティアがネットワークでつながるとよいと思う。
- ・自分は地域で野菜を作っている。地域の日本人と外国人が一緒に野菜を作れば交流できる。
- ・イベントのチラシを日本語学校とか専門学校に配布するとよい。
- ・町会のごみ拾いに日本語学校の生徒が参加しており、上手にごみを拾ってまじめにやっている。
- ・町会のごみ拾いに日本語学校の生徒が参加しているが、一部の生徒は携帯を持ったまま歩いたり、食べ歩きをしたりマナーが良くなかった。

第5回会議（友好都市交流事業の紹介）・異文化交流の取組

第5回会議では、新宿区の海外友好都市交流をもとに、異文化交流について理解を深めた。会議では「市民同士の交流の土台をしっかりと作ることで、自治体レベルでの友好都市提携につながる」などの意見があった。

【資料の概要】

●海外友好都市

◆ギリシャ・レフカダ市

明治時代の文人、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、レフカダ市に生まれ、新宿区でこの世を去りました。この絆をもとに相互に交流を重ね、平成元（1989）年10月12日に友好都市であることを宣言しました。



◆ドイツ・ミッテ区

新宿区とミッテ区（旧ティアガルテン区）は、区民合唱や青少年交流などを通じて交流を重ね、平成6（1994）年7月6日に、友好協定を締結しました。



◆中国・北京市東城区

新宿区と中国・北京市東城区は、老人クラブゲートボールや少年サッカー、卓球などを通じて友好交流を深め、平成7（1995）年10月15日に、友好交流・協力関係締結に関する合意書に調印がなされました。



ギリシャ・レフカダ市との市民交流事業（受入）（令和6年10月）

▼小泉八雲記念公園の見学



▼そば打ち体験



▼書道体験



ギリシャ・レフカダ市との市民交流事業（派遣）（令和7年5・6月）

▼小学校訪問での児童の合唱



▼民族衣装の体験



▼日本文化の紹介（けん玉）



【会議での主な意見】

- ・市民同士の交流の土台をしっかりと作ることで、自治体レベルでの友好都市提携につながる。首長だけで友好都市提携を決めると長続きしないケースもあると思う。
- ・交流はまさに世界の平和につながっていく。民間レベルの交流がボーダーレスにつながる。
- ・青少年の交流は重要だと思う。
- ・交流はイベント参加の意識が強いと思うが、地域の清掃など日常の活動を一緒に取り組むのもよい。
- ・留学生は学位を取るだけでなく、日本の文化をもっと体験することが大切。
- ・外国文化が一番わかるのは、ホームステイやホームビジットだと思う。しかし、知らない人を家に入れることを不安に思う人もいると思う。
- ・留学生などの外国人が清掃活動やイベントに参加しても、その後の交流がない。積極的に何か考えないと交流が続いていかない。
- ・留学生との交流を続けようとしても、午前は授業、午後はアルバイトで忙しい学生が多くて難しい。
- ・日本語学校で社会科見学のようなことをやるとよいと思う。
- ・留学生はボランティア活動に参加すると満足して帰ってくる。
- ・ボランティアのネットワークを作って、自分で手軽に参加できるとよいと思う。
- ・ボランティアのネットワークでは、コーディネーターの役割も大事だと思う。
- ・自分は高校時代の日本人との交流が刺激になり、日本で生活することになった。友好都市交流は青少年の刺激になり、将来の夢にもつながると思う。
- ・ホームステイでは、日本文化を学ぶカリキュラムがあるとよいと思う。
- ・区が主催の「はたちのつどい」には、外国人が多く参加している。
- ・日本語学校では、いろんなイベントに学生が参加しているが、その後も何か一緒にできるとよいと思う。
- ・外国人が住んでいるが、高齢者の集まりになかなか参加してもらえない。気軽に参加できる方法を考えている。

第6回会議（まち歩き）・地域の実情を視察

第6回会議では、地域の実情を把握するため、他の地域と比較してフランス人が多く住んでいる笹笥町地域のまち歩きを行った。また、地域の町会長4名を招いて、地域における多文化共生についてお話を伺った。町会長からは「外国人が防災訓練や親睦会に参加している」などのお話を伺い、委員からは「地域ごとに特性があることを強く感じた」「地域の歴史、文化を大切にしたいうえで日本人と外国人が交流や共生ができていることはよいことだと思う」などの意見があった。

【資料の概要】

笹笥町地域の特徴

- ・新宿区の東に位置し、北側を**神田川**、東側を**外濠**に囲まれている地域です。
- ・地形は、台地から神田川周辺の低地に向かう**坂の多い地域**です。
- ・**江戸時代**には**武家屋敷**や**町屋**、**寺社**が混在していました。
- ・**明治以降**は市街化が進み、高台の**閑静な住宅地**、神楽坂の**商業地**とともに、**工業地**として栄えました。

新宿の地場産業である**印刷・製本関連事業者が多く立地**しています。

- ・**神楽坂周辺**は、**江戸時代**の形態を今も残しており、**風情があるまち**です。
- ・文化財、寺社や坂道などの**歴史的・文化的資源**も数多くある地域です。

笹笥町地域の人口（2025年1月1日）

総人口 40,475 人

日本人 38,137 人

外国人 2,338 人（5.8%）

＊上位3か国：中国 917 人 韓国 447 人 フランス 225 人

＊**フランス人が他の地域よりも多く生活しています。**

アンスティチュ・フランセ東京（旧・東京日仏学院）があることからフランス人が多いと考えられます。



神楽坂について

- ・神楽坂は、**徳川家光**が江戸城外堀や牛込門と同時期に整備した道です。
 - ・神楽坂周辺は、江戸時代の形態を今も残しており、**黒塀の続く石畳の風情あるまちなみ**を形成しています。
 - ・神楽坂から裏道に入ると人目に触れにくく、**隠れ家的なまち**となっています。
 - ・昔は料亭がたくさんあり、**芸者が行き交う花街**（かがい）として栄えました。
- 現在は、昔ながらのお店がある一方、**おしゃれなレストランやバー**もあります。
- ・毎年7月に「**神楽坂まつり**」開催され、**阿波踊り**で賑わいます。



【会議での主な意見】

- ・今日の地域のまち歩きでは、1人の外国人として日本の文化を学ぶことができた。
- ・生まれてから新宿区に住んでいるが、同じまちでも雰囲気が違うので勉強になった。
- ・初めて神楽坂を歩いた。今度は個人的に訪れたいと思う。
- ・神楽坂はフランス人が住みやすい地域だと思う。
- ・外国人に今日歩いたところを紹介したい。
- ・新宿区に長く住んでいるが、笹方町地域は今まで知らなかった。
- ・新宿区にはいろんなまち、いろんな文化がある。新宿とはなかなか一言で表せないと感じた。
- ・飯田橋あたりにフランス人が多いことを知ることができた。
- ・町会長たちの話を聞くと、笹方町地域は大久保地域と比べて外国人は少ないと思うが、日本人と外国人との共生は共通テーマだと思う。
- ・町会長たちの話からは、地域ごとに特性があることを強く感じた。
- ・笹方町地域は町会の数が多いため、1つの町会が小さい。小さいから人づきあいができるのだと思う。外国人の人数などの状況によって、外国人との付き合い方も変わってくると思う。
- ・神楽坂では町会と商店会でいろんなイベントをやっている。自分の地域でも参考にしたい。
- ・全国で商店街が無くなっていく中、新宿区の大久保や神楽坂は元気で活力がある。その中で外国人もいろんな形で貢献しているということは、魅力的であり、自慢できると思う。全国の地域も新宿区のように活力ある地域になってもらえるといいと感じた。
- ・町会長たちから、外国人が防災訓練や親睦会に参加していることを聞いた。地域の豊かな文化を生かしながら、今後も、共生にご尽力いただきたいと思った。615
- ・地域の歴史、文化を大切にしたいうえで日本人と外国人が交流や共生ができていることはよいことだと思う。616

第7回会議（実態調査の考察）・データ分析等

第7回会議では、桜美林大学の岩垂好彦 准教授を招いて、令和5年度に実施した多文化共生実態調査に関する考察を伺った。

岩垂好彦 准教授からは、外国人住民の人口や国籍、年齢、滞在年数などのデータをもとに、「どのように交流を進めるか」について、主に次のような考察をいただいた。

【考察の概要】

◆区の役割はプラットフォームとメディア（媒介、情報発信）

◆ビジネスパーソンと留学生の交流を中心に、地元住民との交流のきっかけ作りを各地で行うことが必要

- ・ 地域センターの活用
- ・ 教育機関（日本語学校、初中高等教育）における交流の促進
- ・ 地元町会の巻き込み

◆特に 20～30 歳代の割合が高い。

◆比較的短期間で人が入れ替わっている可能性がある

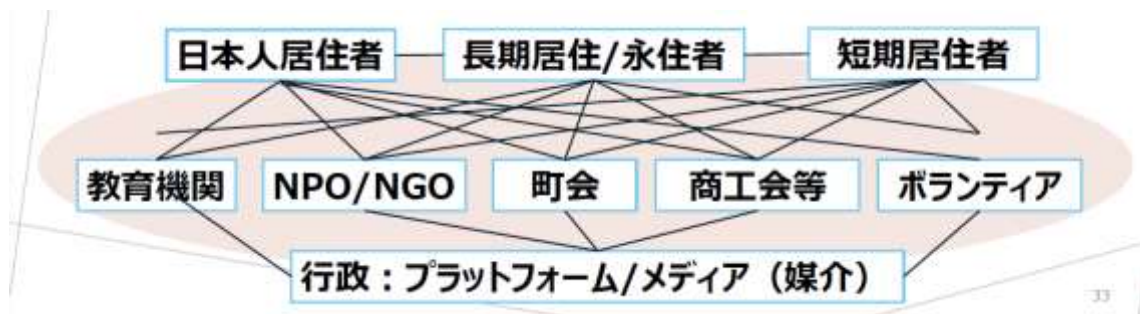
- ・ 町会の巻き込み+既に長年日本／新宿に居住している外国人住民と新しく来日した外国人との交流の場づくり
- ・ 日本語の問題や日本のルール、マナーなどをざっくばらんに話し、相談し合えるような場づくり

◆様々な主体による交流の推進

- ・ 教育機関における国際交流ニーズの高さ
- ・ NPO/NGO、ボランティアの活動の活性化
- ・ 商工会等による交流活動の活性化
- ・ 町会の活動への巻き込み

◆多様な主体がそれぞれの地域において、自分たちにできるところから活動を始めて広げていくことが望ましい

- ・ 各主体間の情報共有とネットワーク化がされることで、交流活動は充実していくことが期待される
- ・ ただし、意欲のある牽引者を様々な主体の中で見つけていくことが重要



【会議での主な意見】

- ・人と人とのつながりが希薄になっている。コミュニケーションを取るのが難しい時代になっている。
- ・イベントは1つの方法だが、イベントをやっても、その後が続かない。
- ・災害は誰にでも起こるので皆さん関心がある。人と人とのつながりに防災といった切り口を入れるとよい。
- ・新宿区はインターナショナルな区なので、人と人が混じり合えば多文化共生のよいモデルケースになると感じた。
- ・ニュースで新宿区のはたちのつどいの参加者の約半数が外国人と聞いて驚いた。留学生が多いので納得した。
- ・地域センターまつりは毎年開催されているので認知度はあるが、単発のイベントは周知に工夫が必要である。
- ・大久保まつりの韓服を着たパレードでは、日本人の学生が参加している。日本と韓国の交流の機会となってよかった。
- ・外国人は仕事やアルバイトで忙しく、地域での交流に参加したくても参加できない人がいる。
- ・インターナショナル事業者交流会では、住宅展示場を会場にして交流イベントを開催している。
- ・インターナショナル事業者交流会では会議を日本語で行っている。日本語が分かる外国人が増えるとよい。
- ・外国から日本に来て生活していると、日本は優しく受け入れてくれる国だと感じる。
- ・日本に恩返しするために地域のボランティア活動をしている。
- ・多文化共生のためには、外国人が町会に参加するように力をいれるとよい。

第8回会議

第8回会議では、これまでの会議の振り返りを行い、審議テーマである「多文化共生の推進に向けた交流について」の提言に向けた意見交換を行った。

なお会議では、第2回会議から第7回会議の資料をまとめたものを資料とした。

【会議での主な意見】

- ・地域の外国人がイベントに参加している。特に子ども向けのイベントに参加していると感じている。
- ・地域で外国人向けの防災訓練をやった。町会、商店街と外国人の距離が縮まった感じがした。
- ・大久保地域のクリーン活動にネパール人が大勢参加している。
- ・「新大久保インターフェス」というイベントを開催する。日本、韓国、ベトナム、ネパール、バングラデシュ、中国の人たちが参加して準備をしている。
- ・子どもに関連する行事には、親は出ていくと思う。
- ・子どもの健診や予防注射は、イベント周知のチャンスだと思う。
- ・行政だけではできないことがある。NPOに活動してもらうのがよいと思う。
- ・交流のターゲットは子育て層だけでなく、高齢者層、若者層もあると思う。
- ・多文化共生の理解が大事だと感じている。
- ・文化を伝えるイベントはとてもよい。
- ・文化体験で参加者は満足するが、日本人と外国人の交流にまで至っていない。例えば学生ボランティアが参加すると、交流につながると思う。
- ・交流イベントの情報を届けるためには、NPO団体が母国語で伝えていくことが必要。
- ・外国人は受け身になってしまう。お祭りなどは、日本人から外国人に声をかけてくれると参加しやすい。
- ・外国の歌や踊りの発表会をやっている。
- ・1人1品の料理を持ち寄って交流会をやっている。日本人と外国人や子どもも参加している。
- ・留学生などが新宿の文化や歴史を自ら勉強し、新しく来日した外国人に新宿の魅力を伝えていくとよい。
- ・学童保育や児童館では、子どもたちは日本人も外国人も楽しく過ごしている。
- ・外国の文化の勉強会をやって、その後、外国の料理を食べに行くといったイベントはニーズがあると思う。
- ・町会や自治会では、外国人を受け入れて仲良くするにはどうしたらよいか話し合っている。
- ・外国人の高齢者に声をかけて交流を重ねていくことが課題になると思う。

- ・地域のイベントに外国人が参加するだけでなく、外国人コミュニティのイベントに日本人が参加するよう呼びかけるとよい。

提言

第7期会議では、審議テーマを「多文化共生の推進に向けた交流について」として審議を行った。

会議では、議論を深めるため、「交流事例の紹介」や「区の実情把握（まち歩き）」などを行った。

委員からは、「日本人と外国人が、様々な活動やイベントを一緒にやると仲よくなる。」「交流はイベントだけでなく、様々な機会があると思う。」「交流のターゲットは子育て層だけでなく、高齢者層、若者層もあると思う。」など多くの意見があった。

ここでは、委員の意見を分類して整理を行ったうえで、文章としてまとめたものを提言として示すこととする。

1 文化体験やイベント、地域活動など交流の機会は様々である

【文化体験は多文化共生の意識を醸成させる】

外国人が日本の文化を体験することや、日本人が外国の文化を体験することは、気軽に楽しく互いの文化を知るきっかけになり、多文化共生意識を醸成させるものである。

地域では日本の伝統的なお祭りやイベントが開催されており、外国人が盆踊りや餅つきに参加している。また、書道や華道、着物の着付けなどの日本文化を体験できるイベントにも、外国人が参加している。外国人が日本の文化を体験することは、日本の文化への理解を深めるだけでなく、日本の生活習慣やルール・マナーを知るきっかけにもなる。

一方、地域では、外国の音楽や踊り、食べ物を紹介するイベントが開催されており、参加した日本人は胸を躍らせて楽しんでいる。外国文化を体験するイベントに日本人が参加することは相互理解につながる。このため、日本人が外国の文化に触れる機会が増えるとよいと考える。

日本や外国の文化体験は気軽に参加して楽しむことができるものであり、文化体験を通じて相互理解が深まり、多文化共生の意識醸成に効果的である。

【文化体験から日本人と外国人との交流へ】

文化体験を楽しむだけでなく、日本人と外国人が互いに文化を紹介したり、一緒に話し合ったり、協力して作業することが交流を促進させることとなる。

前述のとおり、日本や外国の文化体験は気軽に参加して楽しむことができるため、多文化共生意識を醸成するきっかけとなり効果的である。しかし、「面白かった」「楽しかった」というように満足して終わるだけでは、日本人と外国人が交流しているとまでは言えない。

日本人と外国人との交流を促進するためには、例えば、文化体験のイベントに外国人がボランティアとして参加し、自国の文化を日本人に伝えることが効果的である。このことにより、外国人は自国文化への理解や誇りを深めるとともに、日本人と直接会話をすることで親しみを感じるようになる。

一方、地域の日本人が外国人に日本の文化（書道、着物の着付け、盆踊り、けん玉や紙相撲などの昔遊び）を伝えて体験してもらうことも同じように効果があると考ええる。

このような日本人と外国人による自国の文化紹介に加え、日本人と外国人が一緒に話し合ったり、協力して作業をしたりする機会を設けると、さらなる相互理解につながり、交流を促進させることとなる。

【交流の機会は様々である】

日本人と外国人の交流の機会として、地域のお祭りやイベントがある。

そのほか、清掃活動や防災訓練、町会・自治会への参加も交流である。

また、誰でも気軽に利用できる図書館やスポーツ施設、活動団体が運営する交流スペースやカフェは交流の場となる。

様々な機会を通して交流の輪を広げていくとよい。

前述のとおり、日本人と外国人の交流の機会として、まずは地域のお祭りやイベントが挙げられる。そのほかの交流事例として、委員からは清掃活動や防災訓練の話があった。同様に、第6回会議でご参加いただいた町会長からは、外国人が防災訓練や親睦会に参加しているとの説明を受けた。

また、図書館やスポーツ施設、活動団体が運営する交流スペースは、交流の場となる。

様々なイベントや地域活動を通して交流の輪を広げていくとよいと考える。

【清掃活動】

清掃活動に留学生などの外国人が参加している。自分が生活している地域を自ら清掃することにより、環境美化の意識が高まるとともに、地域で気持ちよく過ごすことができる。

【防災訓練】

防災訓練に外国人が参加しており、日本人からは外国人との距離が縮まったと感じたとの話があった。災害は誰にでも起こりうるものであり、関心が高いことから、人と人とのつながりに防災といった切り口を入れるとよいと考える。

【町会・自治会の活動】

町会・自治会に外国人も加入しており、中には自治会長を担っているという事例もある。町会・自治会に加入することで、地域住民との顔の見える関係を築くことができ、地域に愛着を持つことができる。

【交流の場】

気軽に利用できる図書館やスポーツ施設、地域センターなどは、同じ目的や趣味を持った日本人と外国人との交流の場となる。また、活動団体が運営する交流スペースやカ

フェでは、日本人と外国人が気軽に立ち寄って会話をすることができる。

2 日本人と外国人との協働による交流の促進

【日本人と外国人との協働によりイベントや地域活動の運営に取り組む】

地域では、日本人と外国人との協働によりイベントや地域活動を運営している事例がある。これは国籍や言葉の壁を越えて、多文化共生を推進させるものである。

イベントや地域活動に取り組む際には、運営側として外国人の参加を呼び掛けるとともに、日本人は外国人を受け入れる意識を持つことが大切である。また、交流を継続するための関係づくりや、活動終了後の振り返りが大事である。

イベントや地域活動に参加することは、地域に溶け込む絶好の機会となり、地域の担い手として期待することができる。

交流への参加促進のため、行政には地域イベント等を区民へ情報提供することが求められる。

大久保まつりや新大久保インターフェスでは、日本人も外国人も運営側となって頑張っている。また、前述のとおり外国人が町会・自治会に加入している事例がある。日本人と外国人との協働によりイベントや地域活動の運営を行うことは、国籍や言葉の壁を越えて多文化共生を推進させるものである。そして、地域に溶け込み、地域への愛着が大きくなっていく。

このため、様々なイベントや地域活動に、運営側として外国人も参加するとよいと考える。

外国人の中には受け身になってしまう人もいるので、日本人から地域の外国人に声をかけると参加しやすくなる。併せて、日本人側の「一緒にやろう」といった外国人を受け入れる意識を持つことも大切である。

そして、ひとつの活動が終了しても、その後の活動や付き合いにつながる関係づくりが大事である。そのためにも、イベントや地域活動の終了後に振り返りを行い、良い点、改善点を次回に活かしていくことが必要である。

また、地域では、前述のとおりお祭りやイベント、清掃活動、防災訓練など、様々な活動に取り組んでいる。外国人がこれらのイベントや地域活動に参加することは、地域に溶け込む絶好の機会となり、地域の担い手として期待することができる。このため、地域住民や、外国人コミュニティなどの活動団体が開催しているイベントや地域活動を、行政は区民へ情報発信を行うことが求められている。

【ボランティア活動への参加促進】

ボランティアに興味のある外国人は多い。協働の第一歩として、地域活動に外国人がボランティアとして参加することで、地域に愛着が生まれて多文化共生の促進につながる。

委員からは「私は日本に恩返しするためにボランティア活動をしている」「留学生はボランティア活動に興味を持っている」「ボランティア活動に参加した留学生たちは満足して目が輝いている」との意見があった。ボランティアに興味のある外国人は多く、具体的な参加の事例としては、イベントのスタッフや、清掃活動などが挙げられる。

協働の第一歩として、地域活動に外国人がボランティアとして参加することで、外国人は地域に愛着が生まれるとともに、日本での生活に充実感が生まれる。

また、ボランティア活動を通じたつながりは、まさに日本人と外国人との交流であると言えることから、今後、様々な地域活動へと発展していくことが期待できる。

なお、留学生が清掃活動などのボランティア活動に参加する際には、地域に貢献するといった意識を持って取り組んでほしい。このため、留学生を送り出す学校が、留学生に対して「地域を良くするため、共生するためにボランティアに参加している」といった意識を持たせることに留意することが必要である。

3 イベントや地域活動への、多様な世代（親子、高齢者 若者）の参加促進

子ども向けのイベントは、日本人も外国人も親子や友達と一緒に楽しむことができる。

また、外国人の高齢者と若者へのアプローチも大事であり、高齢者に対しては、地域住民や活動団体が交流会やイベントへの参加を声掛けするとよい。若者層としては、新宿区は留学生が多いことから、学校を通じて留学生にイベントや地域活動の情報を提供して参加を呼び掛けるとよい。

地域のイベントには外国人も参加しており、中でも、子ども向けのイベントでは、親子で参加して楽しんでいる姿が見られる。

また、子どもは親や友達に参加するイベントには、自然と自分も参加してみようと思うようになる。

このように、子どもが参加できるイベントは、日本人も外国人も親子や友達と一緒に楽しめることから、交流の機会としてはとてもよいものであると言える。

そして、日常生活の場である学校や学童、保育園などにおいては、日本人と外国人の子どもたちは楽しく交流している。

子どもの頃から異なる国の文化に触れることは刺激になり、子どもたちの夢につながっていくものである。まさに、子どもの頃からの交流は、未来の多文化共生への架け橋になると言える。

一方で、子育て世代だけでなく、高齢者、若者へのアプローチも大事である。

委員からは、高齢者の集まりになかなか外国人が参加してくれないとの意見があった。高齢者の外国人の場合、地域で孤立しているケースもあるため、地域で交流することは、地域で孤独にならないためにも、健康増進のためにも重要である。

このため、地域の交流会やイベントに気軽に参加できるよう、地域住民や活動団体が外国人の高齢者に対して声掛けして参加を促すとよい。

また、若者へのアプローチとして、新宿区は留学生が多いことから、留学生を巻き込んだ交流が効果的と考える。このため、学校を通じて留学生にイベントや地域活動の情報を提供して参加を呼び掛けたり、留学生にボランティア参加を促したりするとよい。留学生のイベントや地域活動への参加で交流が広がることによって、地域の担い手としての若者の活躍に期待できる。

4 交流を促進するための効果的な情報発信

イベントや地域活動への参加を促進するためには、チラシなどの紙媒体に加えて、SNS などの電子媒体による情報提供が効果的である。さらに情報を広げるためには地域のネットワーク（学校、町会・自治会、活動団体など）を活用するとよい。

イベントや地域活動への参加を促進させるためには、日本人と外国人の両者に対する効果的な情報提供が必要である。

委員からは「イベントの情報がなかなか届かない」「チラシを配布するだけでは参加してもらえない」との意見があった。

イベントの中でも、地域センターまつりなど毎年開催される大きなイベントは認知度があるが、単発のイベントは認知度が低いため、周知に工夫が必要である。

このため、イベントなどの情報提供は、従来のチラシ配布やポスター掲示などの紙媒体に加えて、ホームページや SNS などの電子媒体が有効であると考ええる。

さらに、情報を広げるためには、日本語学校や専門学校、町会・自治会、商店会などのネットワークの活用が効果的である。。また、外国人コミュニティが母国語で地域のお祭りなどを伝えると情報が広がる。

加えて、行政手続きや健康診断などの機会を捉えて、イベントの周知を行うのも参加を促すよいきっかけになると考える。情報は発信するだけでなく、どのように人へつなげていくかが大事である。

5 新宿区は多文化共生のモデルケースである

新宿区は地域ごとに特徴（文化）がある多様なまちである。地域によって外国人の人数は違うが、日本人と外国人との共生は地域の共通テーマである。

新宿区はまちに活力があり日本人も外国人も貢献している。新宿区は多文化共生のよいモデルケースになっている。

新宿区は地域ごとに特徴（文化）がある多様なまちである。また、地域によって外国人の人数は違うが、そのうえで共生に取り組んでおり、日本人と外国人との共生は地域の共通テーマである。そして、新宿区はまちに活力があり、日本人も外国人も貢献していることから、新宿区は多文化共生のよいモデルケースになっている。

一方で、時代とともに都心区では人と人のつながりが希薄になっている。日本人と外国人とのつながりだけでなく、日本人同士の顔の見える関係の構築も必要であり、コミ

ユニティの活性化が重要である。

委員からは、外国人も町会に加入しているとの意見や、町会で外国人の受け入れを話し合っているといった意見があった。外国人の地域参加とともに、日本人の外国人を受け入れる意識も大切である。

6 おわりに

第7期会議では、審議テーマを「多文化共生の推進に向けた交流について」として審議を行った。

委員からは、具体的な交流事例の紹介や体験談、日本人と外国人の交流への参加促進について多くの意見があった。

気軽に参加できる地域のお祭りやイベントは、日本人も外国人も楽しめるものであり、中でも、日本や外国の文化を体験できるイベントは、相互理解につながるものである。また、交流の機会はイベントだけではなく、清掃活動や防災訓練など様々である。。

イベントや地域活動に取り組んでいる町会・自治会や商店会、活動団体の皆様に敬意を表するとともに、多くの日本人と外国人の参加を後押しする役割を行政には期待したい。

交流を機会に日本人と外国人が協力して地域活動に取り組むことで、さらなる多文化共生が推進され则认为る。

資料

第7期 新宿区多文化共生まちづくり会議委員一覧

	団 体	氏 名	国 籍
会長	東京未来大学 モチベーション行動科学部教授	カク イ ヨ 郭 潔蓉	日本 ※台湾出身
	早稲田大学教育学部教授	コバヤシ アツコ 小林 敦子	日本
	宇都宮大学国際学部助教	シン ヘウオン 申 惠媛	韓国
副会長	明治学院大学 教養教育センター准教授	ハセ ベ ミカ 長谷部 美佳	日本
	関西国際大学客員教授	メンジュ トシヒロ 毛受 敏浩	日本
	区民	イワノ ユウイチ 岩野 雄一	日本
	区民	ゼヤー トウエ	ミャンマー
	区民	マツダ ナミ 松田 奈己	日本
	区民	ヤン ウンヨン 楊 恩榮	韓国
	在日本東京韓国人連合会	イ ヒャンスン 李 香順	韓国
	在日フランス人協会	エゾエ 江副 カネル ジョエル	フランス
	在日本大韓民国民団新宿支部	キム ドゥヒョン 金 料炯	韓国
	(株)MAKOTO	グエン チュン タイン	ベトナム
	(株)Oyraa	コチュ オヤ	トルコ
	認定 NPO 法人シャプラニール	フジオカ エミコ 藤岡 恵美子	日本
	国際交流ネットワーク・ヘルスケアグループ	シュウク エン 叔 焱	中国
	在日タイ人ネットワーク	スズキ 鈴木 ノンヤオ	タイ
	新大久保インターナショナル事業者交流会	タケダ カズヨシ 武田 一義	日本
	NPO 日本国籍華人同携会	タチカワ マサアキ 立川 雅章	日本
	新宿区多文化共生連絡会	チェン リティン 陳 麗婷	台湾
	(株) ASP Japan	ドゥラ リトゥ クマル	ネパール
	さくら日本語サークル	ハラダ ケンイチ 原田 健一	日本
	I C B 協同組合 専務理事	パク サンボム 朴 相範	韓国
	(株)GMT インターナショナル	マッラ ティラク バハドウル	ネパール
	難民連携委員会 事務局長	マリップ センプ	ミャンマー
副会長	新宿区商店会連合会	イトウ セツコ 伊藤 節子	日本
	日本語学校	イノウエ タカヨシ 井上 貴由	日本
	専門学校	ツカモト タカユキ 塚本 隆之	日本
	新宿区町会連合会	ミナミ ヨシコ 南 嘉子	日本
	新宿区民生委員・児童委員協議会	ムナカタ ススム 宗像 進	日本
	新宿区町会連合会	モリシゲ ユウコ 守重 有子	日本
	新宿区町会連合会	ヤマグチ 山口 みちよ	日本

